

自閉症スペクトラム障害の早期介入における子育て支援の役割 — 支援の視点と技術とシステムと —

The role of parenting assistance in implementing early intervention in autism spectrum disorder (ASD):
Supportive perspectives, skills, and systems

後藤 慶子¹⁾・三隅 輝見子¹⁾・清水 康夫²⁾・今井 美保³⁾・岩佐 光章⁴⁾

Goto Keiko Misumi Kimiko, Shimizu Yasuo, Imai Miho, Iwasa Mitsuaki

1. はじめに

自閉症スペクトラム障害(以下ASD)への早期介入は、子供の療育と親への支援の両輪からなる¹⁾。これまで早期介入においては、子どもに対する療育が基本と言われてきたが、効果をあげるには親が家庭における養育の中に、治療的な要素を含ませることが必要となる。つまり両輪である以上、どちらが基本とは言えない。また、親はわが子の障害を知って大きな不安を抱えた状況にもあるため、親のメンタルヘルスについても配慮することが必要である。

親への支援を中心としたプログラムは「ペアレント・トレーニング(以下PT)」として実施されることが多い。これは1960年代にアメリカで始まった行動学習理論に基づく介入方法である。主として数週間にわたる特殊なカリキュラムを通して、子どもに対応する行動原理を教えるものである。これらには個別に行うものと集団でおこなうものがあるが、近年は集団で行われることが多い²⁾。日本でも近年、発達障害児へのPT³⁾など、さまざまな臨床場面で実施されている。しかしPTは対応の行動原理を教えることが主となり、親自身のメンタルヘルスを支援するカリキュラムはない。

また親支援プログラム自体の研究や報告はまだ少ない。しかしその中でも課題としてあげられるものには大きく分けると3つある。

① 多くの臨床現場では診断と治療の場が連動していないため、適切な時期に適切な支援を実施でき

ない。

② 効果の持続性やスキルの維持に関する継続的なフォローアップの報告が少ない。

③ 養育が困難な子どもを持つASD児の親の認知過程とその支援についての研究が少ない。

横浜リハセンター(以下YRC)では早くからASD児への早期介入において、子どもへの療育を効果的に行うために親への支援が必要であることを述べてきた。今回の報告では、従来の親支援プログラムの研究や報告で課題となっている①～③の視点について、診断と治療が連動したシステムにおいて実施したASD児の親支援プログラムの考え方と方法について整理する。さらにその効果の持続について報告をする。

2. YRCにおける早期介入システム

YRCではASD児の発見から診断・療育を一貫した早期介入システムとして実施してきている。このシステムは2ステップ方式をとり、第1ステップは導入プログラムとして心理・行動評価と療育への導入を目的にしている。そして第2ステップに本格的な早期介入としての年間を通した介入プログラムが用意されている。これらのプログラムはいずれにおいても子どもへの療育と親への支援を両輪としてバランスよく用意されている(図1)。

1) 横浜市総合リハビリテーションセンター
発達支援部 療育課

2) 横浜市総合リハビリテーションセンター
副センター長

3) 横浜市総合リハビリテーションセンター

4) 西部地域療育センター 診療課

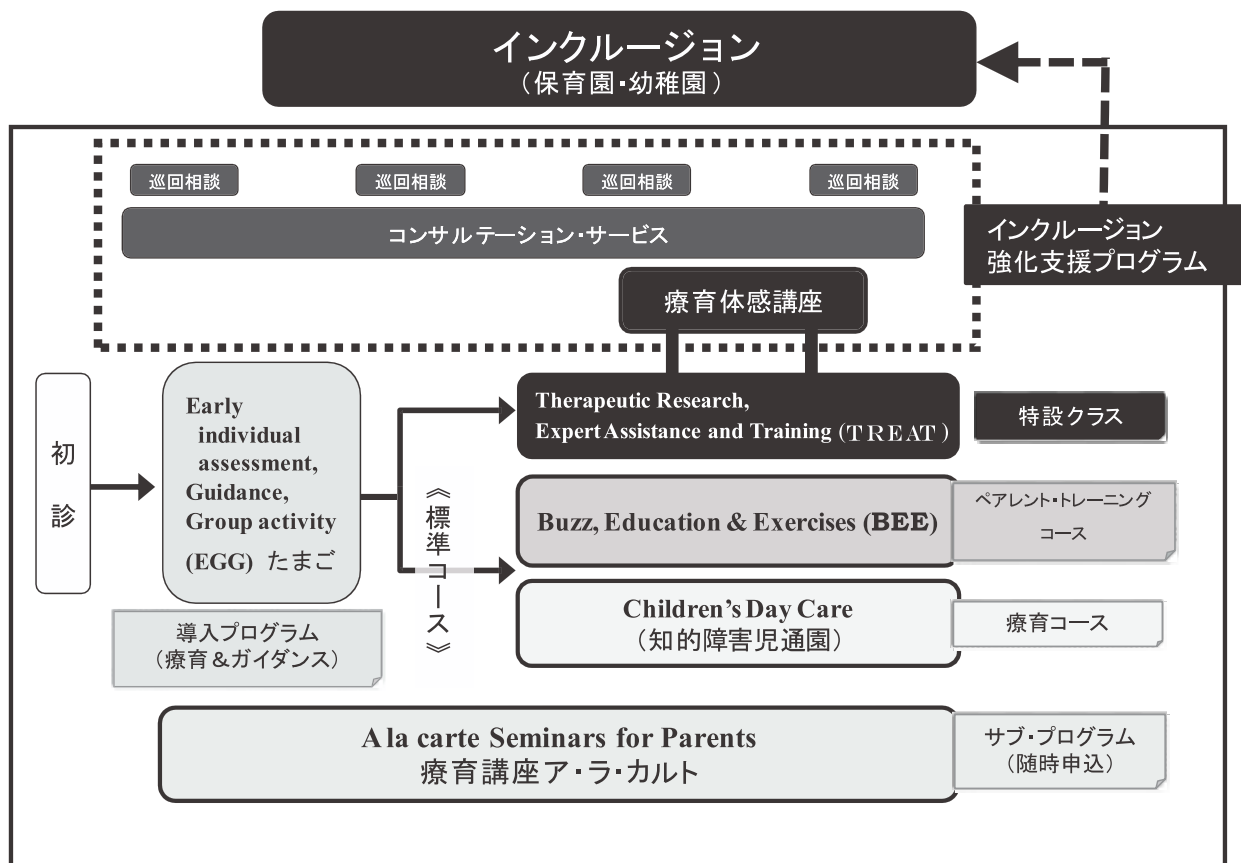


図1 横浜市総合リハビリテーションセンターの早期介入システム

3. 目的

ASD児はその認知メカニズムの違いから通常の子育て方法では上手くいかないことが多く、親は子育てへの失敗感を持ちやすい。知識や技術を学んでもASD児とのコミュニケーションの少しの相違に自信を失いがちである。そのため本プログラムをつくるにあたって、そのねらいとして親がASDの知識や対応技術を学ぶことに加えて、子育てをポジティブにとらえることができることが重要であると考へた。そこで本プログラムでは、「保護者教室」という名称の保護者勉強会を中心に実施する中で、親がASDに関する知識や対応の技術を学びながら「子育て観の再構築」をすることを目的とした。

4. 方法

YRCにおいてASDの診断を受け、心理・行動評価と療育への導入を目的とした導入プログラムを利用後、「家庭療育を親が学ぶ」というねらいのも

と、本プログラムを選択した幼児(3歳児～5歳児)の親を集団化(10名)し9ヵ月間、同一のメンバーで1～1.5ヵ月に1回の割合で保護者教室と個別指導を組み合わせた支援を行った。今回はそのうち保護者教室について詳しく述べる。1回の保護者教室は1時間半程度で、テーマは系統だったものを設定して実施した。

5. 【支援の視点】子育て支援：3つの学習モード

ASD児の子育て支援においては、従来の理論学習の際に用いられる「情報交換をする」「専門家から知識を得る」要素に加え、「体験的に学ぶ実践」が重要である。これらを本プログラムではそれぞれ「Buzz:しゃべって」「Education:聞いて」「Exercises:やってみて」と表現し、親に最初から意識させる(図2)。

さらに従来のペアレント・トレーニングの実習では、子どもへの対応を学ぶことに重点が置かれているが、本プログラムでは、「親が対応の際に起こる自己の感情に気づいて、言語化できるようにするため、子どもや親の立場を疑似体験し、感情を言語化

する」実習に重点を置いている（図3）。



図2 保護者教室の様子

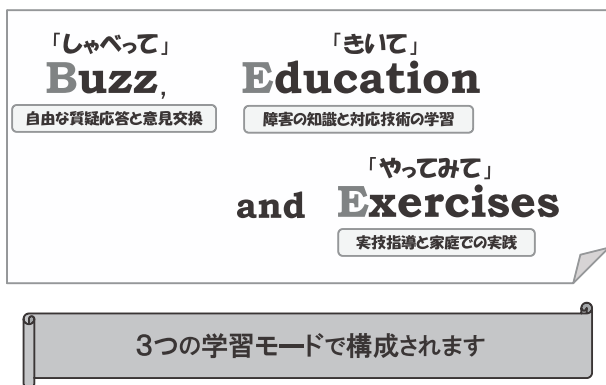


図3

6 支援の技術

6.1 系統だったテーマ

ASD児に対する正しい知識と行動学習に基づく介入は、児に適切に接するための基本のテーマになる。

本プログラムでは、親自身が子育て観を見直すことを目的にしたテーマを加えて以下のような系統だったテーマ設定をし、テキスト化した（表1）。

6.2 感情の言語化

前述したようなテーマを設定しながら、1回の保護者教室の中では、集団カウンセリングの要素を取り入れ、親が無理なくプログラムを理解し、実践していけるような工夫を行っている。

これが親自身の感情を言語化するためのプログラム構成である。

実践を通して親は子育てに対して様々な感情が沸き起こっていることに気付く。それらは通常は個別

表1 主なテーマと内容

1回目【自己紹介】【ASDの特性】 ■ミニ講義（ASDの特性） ■わが子の自己紹介を構造化された書式にそって行う
2回目【ASDへの理解】 ■ミニ講義（行動観察と仮説の立て方） ■バズセッション（わが子の困った行動）
3回目【ASDへの対応】 ■ミニ講義（構造化の原則） ■ロールプレイ（構造化の実習）
4回目【子育てを振り返る】 ■ミニ講義（“人”を育てる視点） ■ロールプレイ（しつけ場面）
5回目【問題行動への対処】 ■ミニ講義（問題行動の定義と対応） ■バズセッション（問題行動への対処）
6回目【プロフィールづくり】 ■ミニ講義（地域連携の基本的姿勢） ■バズセッション（わが子の特徴をどう伝えるか）

での専門家とのやりとりなどを通して解決をしていくが、本プログラムはそういった個別での関わりに加えて、集団においても行っている。

集団においては個人的体験はイメージが共有されにくく、集団の中での共感は得にくいことが多い。そこで本プログラムでは、以下のような工夫を行った（図4）。

【第1段階】

これまでの体験の中でテーマにそった意見を事前に準備し、グループ内で発表する経験をする。

【第2段階】

実習のテーマやどのような心構えで実習に臨めばいいか、さらに実習後に感想を述べてもらう点についても具体的に伝えた上で、グループでの実習を行う。

【第3段階】

テーマに基づいて、親が体験したことについて報告し、さらにそのときの自身の感情についても述べる。

7 結果

7.1 親の満足度

全プログラム終了後、プログラムに参加した親10名全員に満足度調査を実施した。

満足度調査には自由記述欄を設けており、親が自由に意見を述べられるようになっている。その内容は「意見交換ができた。悩みを共有できた」「知識や対応を学ぶことができた」「子育ての意欲を持った」という3つに分けることができた（表2）。

第1段階: 保護者が構造化された状況で自分の意見をいう体験をする。

保護者教室② バスセッション
始まる前に準備しましょう

- ①お子さんの「困っている行動」(今困っていない方は「気になる行動」)を書き出してみましょう
- ②書き出した中で一番困って(気になって)いることを決めましょう

「わが子の困った行動」

紙芝居でテーマや事前の心構えを伝え、話すための心の準備をしてもらいます

第2段階: 保護者がロールプレイで生じた感情を言う。



「構造化の実習」

絵で見ると、言語指示だけ。どちらのほうがわかりやすいか、子どもの立場を実感してもらう。

第3段階: テーマにそって自己の体験で生じた感情を言う。

- ①グループに分かれる
- ②バスセッションの後、各グループに発表をしてもらいます。発表者を決めます
- ③事前に書いてもらったものの中から一つのテーマを選んで次のことを話し合う「自分ならどう対応するか」
- ④グループごとに発表

「問題行動への対処」

グループで保護者が主体的に話し合えるように、進め方や目的を紙芝居で伝える。

図4 感情の言語化

表3 親の変化

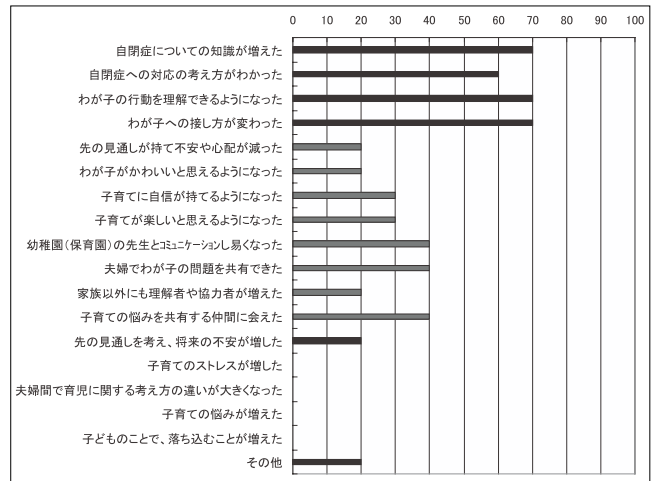
表2 親の自由記述

<意見交換できた。悩みを共有できた>
 ・さまざまな意見交換ができ、満足でした。
 ・同じ立場の親としていろいろな悩みや思いを話せたことはとてもよかったです。
 ・共通の悩みを話せて共有できたことで気持ち楽になりました。
 ・他の親御さんの体験や対処法を伺うことができたのは大変参考になった。

<知識や対応を学ぶことができた>
 ・子供の行動について、それには原因があると常に考えるようになったことで対応の仕方が変わりました。
 ・対応の仕方のコツを学ぶことで、次第にコミュニケーションがとれるようになりました。

<子育ての意欲を持った>
 ・まだ子育ての不安はつきませんが、前向きに取り組んでいこうと思えました。

また親自身の変化についてたずねた「親御さん自身に変化はありましたか?」といった項目で複数回答可でチェックするものでは、知識や技術を得たという項目に加えて子育て観に関する項目へのチェックが見られた(表3)。



7.2 親支援プログラムの持続効果

本プログラムに参加した5歳児のアスペルガー症候群女兒の母親の参加初期の状況と参加後半年後の面接での報告からトレーニング効果の持続について述べる。

プログラム参加当初は保護者教室後の面接で、「物事をスムーズに理解するために視覚で教えるこ

とは本当に必要なのか？」と述べるなど、ASD児であるわが子に対する視覚的支援について疑問を持つ姿勢が見られた。しかしプログラムに参加する中で知識を身につけたり、他の参加者の実践や子育て観に触れる中で、視覚的支援の必要性を感じるようになっていった。

そしてプログラム終了半年後の面接では、「就寝時、いつも繰り返し『“寝る”の次は何？』と確認することが常だった。母親自身がその繰り返しのイライラして怒ってしまうことが多かったが、プログ

ラムで習ったことを思い出して、よく考え直してみたら、自分で“おしまい”と繰り返して納得しているようなところがあったので、メモを使って予定を書き、“寝る”のあとに“おしまい”と書くようにしたらすんなり納得した。視覚的に書くって大切ですね」との報告があり、普段使用しているノートを見せてくれた。

このように、プログラム終了半年後にも、日常の子育てにおいて学んだ知識や対応をわが子に合わせて工夫しようとする実践が見られた(図5)。

【トレーニング効果の持続】

本プログラムに参加した5歳児のスペルガー症候群女児の母親の例。

＜プログラム参加時の感想＞

***本日、一番お話されたい内容はどのようなことですか？**

・物事をスムーズに理解するために視覚をある程度活用することは必要ですか？

＜プログラム終了半年後の報告＞

就寝時繰り返し「“寝る”の次は何？」と確認。習ったように児を観察してみたら“おしまい”と自分で言って納得しているので、就寝時に“寝る”の次に“おしまい”とメモ帳に書くようになったら納得。観察する・視覚的に書くって大切ですね」



半年後も日常生活の中で学んだ知識や対応をわが子に合わせて活用できていた。

図5 効果の持続

8. まとめ

本プログラムでは、ASDの知識や対応方法を学ぶことに加え、親自身の認識がポジティブに変化することを「子育て観の再構築」と定義し、支援の考え方や技術の整理をした。具体的には保護者教室において、親が知識や技術を学ぶための系統だったテーマを設定し、参加した親が子育てに対する感情を言語化できるような構造化を行った。これによ

て親が自分自身の子育てを客観的に振り返るといった趣旨の感想が多く見られた。その結果、ASD児に対して親が対応を工夫するという効果が見られただけでなく、親自身の子育てへの認識に変化が起き、子どものネガティブな面だけでなく、ポジティブな面について言及するという変化が生じた。この対応における変化とわが子に対する認識の変化は半年後にも持続し、日常生活においても親が自ら考えて工

夫することが見られた。

ASD児の早期介入においては、子育て支援という観点でASD児への知識や対応について学ぶことに加え、子育て観を再構築するためのプログラムを加えることが有効である。これは逆に親が自分の子育て観をポジティブなものに再構築できれば、知識や技術の効果も持続しやすいと考えられる。

参考文献

- 1) 清水康夫、本田秀夫：自閉症スペクトル障害の早期介入. わたしの治療法－広汎性発達障害－. 精神科治療学18(8): 987-993, 2003
- 2) Barlow, J: Systematic Review of the Effectiveness of Parenttraining Programmes in Improving Behavior Problems in Children Aged3-10 Years, 2nd edn. A Review of the Literature on Parenttraining Programmes and Child Behaviour outcome measures. Health Services Research Unit, University of Oxford, 1999
- 3) 山上敏子：「お母さんの学習室－発達障害児を育てる人のための親訓練プログラム」二瓶社, 1998

[第21回日本発達心理学会

(2009年3月26日～28日、兵庫県神戸市) にて発表]